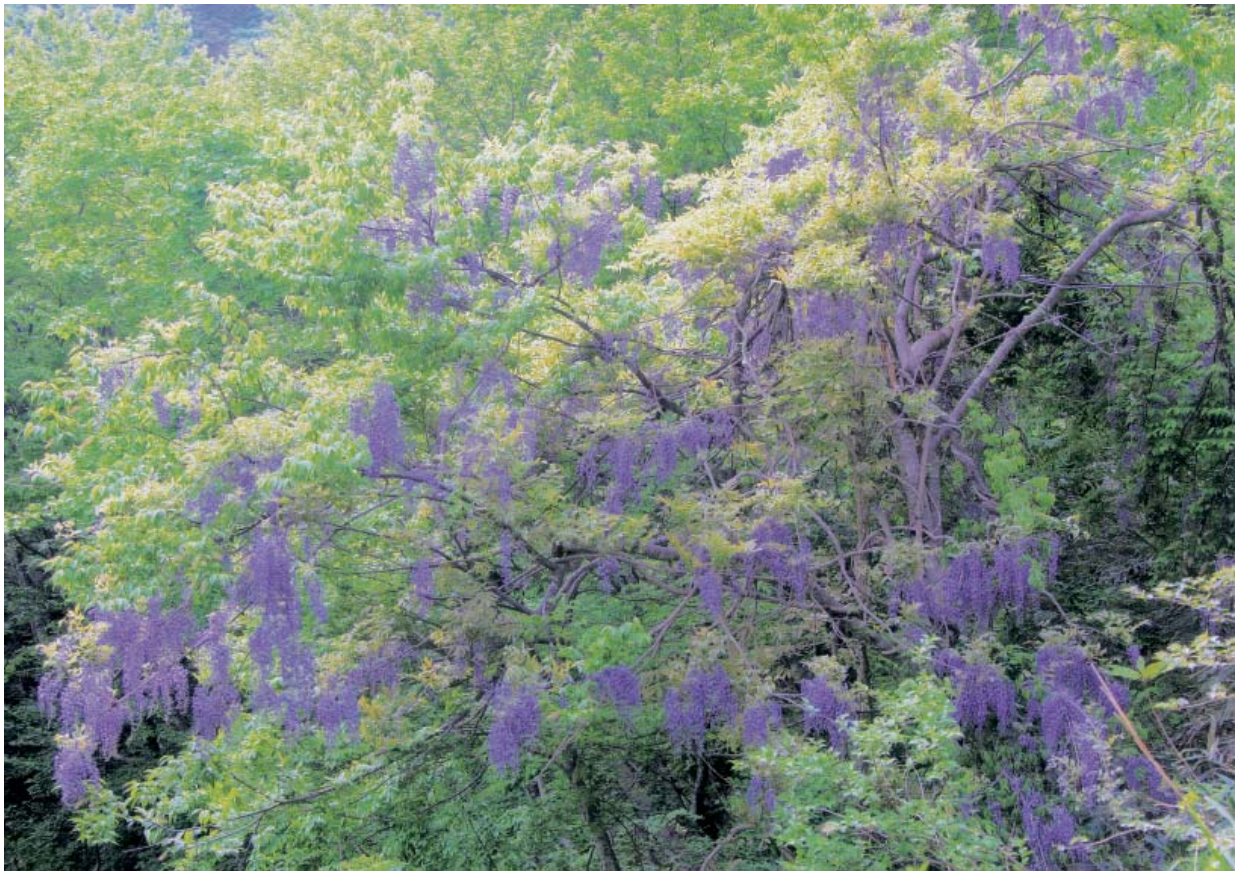


福井県医師会

だより

第623号 平成25年(2013)5月



宝慶寺峠の大山藤

福井市 吉村 信

表紙写真説明：宝慶寺峠の大山藤

福井市 吉村 信

5月の末、池田町の龍双ヶ滝を見物後、すれ違いも困難な一車線の林道を、宝慶寺側に降りていくと、谷底から屹立する榎の大木に絡まる大山藤を発見した。普通は山藤は下から仰ぎ見るものであろうが、峠で、林道から水平に眺め得たため、さながら藤棚を鳥瞰するような奇観を愛でることができた。同行していた妻も「一生に一回の景色ですね!」と感嘆していた。

新緑の峠を飾る 藤錦

醫 縫 録

嶺南医療圏における国立病院機構 福井病院の現状と将来



国立病院機構福井病院長 半田 裕二

国立病院機構福井病院に着任して4年が経過しました。副院長として修業した後、24年度より院長職に就きましたが、診療業務に加えて管理業務も多く過酷なスケジュールをこなしています。

当院は敦賀^{れんたいえいじゅ}聯隊衛戍病院として開設し、戦後に国立療養所敦賀病院となり、平成15年に国立療養所福井病院(現レイクヒルズ美方病院)と統合し、前千葉院長のもとに敦賀の場所に国立福井病院となり、平成16年4月に独立行政法人国立病院機構福井病院と改称され現在に至っています。国立病院時代は、全国にて数千億円の負債を抱えていましたが、全病院の経営努力により、機構全体として黒字経営に転化されました。国からの交付は減少し続け、地方自治体からの交付金も皆無の状態、各病院の努力により黒字化したことは特筆すべき事と考えられます。当院も多額の負債を負いましたが、4年前より黒字経営を維持しています。今後は民営型の新たな法人への移行を目指しますが、昨年の衆院解散により法制化は断念されています。

病院長に就任するにあたり機構本部にて面接のために事前提出したレポートをもとに、病院の問題点、地域の問題点、将来の目標などに関して記述いたします。

大きな問題点として、①2つの国立療養所の統合以降、当院の地域での役割に関するビジョンが不明確。②慢性的な医師および看護師不足である。③政策医療(重症心身障害児医療、結核医療)(結核病棟はユニット化へ変更済み)の経営が負に傾いている。④近隣の公立病院との棲み分けや協力体制が不十分であることが基本的に挙げられました。

このような状況で、上記の政策医療に加え、一般急性期医療から慢性期治療まで幅広く行っていますが、病床数は制限され、病棟や中央部門なども狭小であり、スタッフ不足と関連し、新部門の設立は困難と考えられました。そこで、現施設での診療機能の充実化を図りました。最近数年間かけて、①全部門の電子カルテ化、1

T化、②全診療科・部門は共同的に、最新の機器を新規購入、③各部門の医療補助者等の増数を行い業務能力の不十分な部門を援助。以上を病院独自の資金で達成してきました。

地域の社会的問題点として、嶺南の公立病院はこれまで潤沢な原発立地交付金等による建物や機器整備、医師確保が行われてきたために、各病院の将来像は不明瞭な状態です。さらに、原発不況に加えて地域の高齢化の進行により、労働人口の減少による一般患者数は減少し、各病院の経営に影響を及ぼしています。一方では、嶺南医療圏での医師として勤務が義務となる医学生が1学年に7、8人程度、10年間にわたり卒業が予定されています。このような状況で、彼らの医師としてのキャリアアップのためには、限られた患者数と医療資源を有効に活用するために、各病院と地域診療所との総合的連携を計画することが必要となっています。

平成24年度は、順調に経過しました。新しく3.0T MRIの設置、インフラ整備も順調に行い、経営面では、自立支援法の改正による重症心身障害児病棟の施設基準等変更に対しスタッフ割り当ての適正化により大幅な赤字が是正されたこと、結核病床削減の半面で、一般病棟での診療が順調に行われた事などにより、医業収支、経常収支ともに黒字であり、病院職員全ての努力の結果と考えます。平成25年度は、医師を含めた病院スタッフ数も微増の方向へ向かっています。また病棟、手術室などの改築計画に着手しました。まず病院のスタッフと家族、全ての地域医療機関、さらには地域住民を守る事、この前提を崩さずに、より開かれた病院の運営を行っていきますので、今後とも医師会の皆様のご支援をよろしく願いいたします。